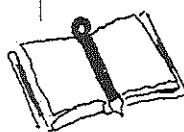


仏教が説くところの「業」の教えは、この
ような自分の誕生や、自分が今立っていると
ころの現実の人生状況に対する、私の心の姿
勢、構え方について教えたものであります。

責任をとるという、心の姿勢について明かしたことになります。共業とは、私の現実の人生状況について、それを他の人々との共同の責任であるととらえることをいい、不共業とは、その現実の人生状況について、それをまったく私個人の責任であると受け止める考え方を言います。親と子が、あるいはまた夫婦や兄弟が、さらにはまた国民全体が、それぞれの現実状況を、自分たちの共通の責任であると感知し、その現実を共同して背負うてゆこうとすることを共業といいます。そしてほかの誰にも代わってもらうこともできず、まったく私一人の責任として背負うて行こうとするものを不共業というわけです。仏教では、私の人生における様々な出来事について、それらすべてが、根源的にはこのような共業と不共業、私と私たちの責任によって生起したものであると、よく受け止めて生きよと教えるのであります。すなわち、過ぎ去った人生に対しては、きびしくかえりみつつ、それをこれから的人生の礎石とし、肥料として転じてゆき、現在の人生状況に対しては、自分および自分たちの責任として勇敢に背負いつつ全力を挙げてその状況と深く切り結んで行きまた未来の人生に対しても、自分と社会の理想を求めてせいいっぱいの努力を重ねてゆよというわけです。かくして自分の人生は、その誕生から日々の出来事にいたるまで、もつとも根源的には、自分自身の責任と感知し



自分の双肩に背負うて立つ」ということ、仏教は人生に対する基本の態度、心の姿勢を、「」のように教えてきているのであります。

私たちの人生の生きざまにおいては、何よりも仏教における「業」の教えがあかすようないちばん大切なではないでしょうか。もちろん、他人の責任を問い合わせ、政治の責任を追求することも必要であります。また時には運命を思うこともやむをえない」とあります。しかしながら、その人生の営みのもつともふかいところでは、自分の人生は、何よりも自分自身の責任として、さらにはまた自分たちの共同の責任として、まず自分が背負うて立つことが大切であります。そしてここにこそ、はじめて私たちの人生の新しい道が切り開かれ、どれほど行き詰った人生にも、必ず明るい光がともり、世の中の矛盾もよく解決されてゆくのだ、ということを忘れてはならないと思います。すでに与えられている私の生命です。そしてともかくにも、ここにまで生きてきた現実の私の人生状況です。しかも私たちの人生はたつた一回限りです。それはもうやりかえはできません。いまさらよくよくと運命を睨い、他人をうらやんだところで、何も新しい道はひらけてはきません。たとえどれほどきびしくとも、醒めた眼をもつて、いまの人生状況を見つめ、そこにしつかりと足をおろして、勇敢にそれを自分自身の責任として背負うて立つ、という心の姿勢こそ、確立すべきでありましょう。私たちの人生生活とは、何よりもこのよくな強い心の姿勢、確かな心のかまえをもつといふにこそ、よく成り立つてゆくものであると思ひます。

智慧・慈悲のはたらきのものが

坂東性純師の言葉です。この言葉をよくかみしめてみると、不思議な味わいがあることに気が付きます。「仏」は智慧と慈悲となって、はたらいていらっしゃいます「仏」とは表現されています。「智慧・慈悲のはたらきそのものが『仏』なのです」「といわれています。「仏」は智慧と慈悲となつて、はたらいていらっしゃいます」と表現した場合、どこか「仏」は遠いところにおられ、そこから「智慧」と「慈悲」となつてはたらいておられるような、場合によつては疎外感を感じさせるような表現になりかねません。「智慧・慈悲のはたらきそのものが『仏』なのです」といわれるど、「仏」は「はたらき」、言い換えると、この私の上で「はたらき続けてやまない」すがたとして味わう」とができます。

親鸞聖人の言葉を通して、「智慧」と「慈悲」について味わつてみましよう。いまここで私が唱える念仏、それがそのまま「智慧」のはたらくすがたなのであり、私が本願の心を疑いなく、聞き入れ、信順することが「智慧」を得ているということに他ならないのです。「智慧」のはたらきとは、淨土と本願のいわれを聞き、仰せの通りに念佛し信順しているこの私の上で、「智慧」の潤いが生まれつつある「という」とです。お詫びさまや阿弥陀さまの慈悲は、文字通り、この私に「無上の信心」や「信心の智慧」を起させるはたらきであります。この私の上で「信心の智慧」となつてはたらいていらっしゃる阿弥陀さま、そして、必ず「信心の智慧」を得させようとははたらいておられる阿弥陀さま。そのはたらきの他、別に仏さまがおられるのではなくかったのです。私たちは、みな、阿弥陀さまとともにあつたのです。そう氣づいて歩む人生が、親鸞聖人の言われた仏道であつたのでしょう。

「」というお話を聞いてきました。「うちのピアノ」が「但馬空港ピアノ」になりました。住職が「おんぶの祭典委員会」の席で「空港にピアノを置きたいね。だれか寄贈してくれる人はないかな」とすん